

## J. Dewey の「状況」概念に見られる諸問題 —「状況」を、活動主体が構成する意味文脈として理解するために—

杵 淵 俊 夫\*

(平成8年4月30日受理)

### 要 旨

人間経験の多様な諸領域に関して表明されている、John Dewey の見解は、要するに「経験の再構成」をめぐる展開されたものである。「経験の再構成」の過程は、活動主体が自らの習慣的な活動の様式を「反省」活動の操作を通じて「再構成」する過程である。この「反省」の操作を、J. Dewey は、「探究」理論の名著『論理学——研究の理論』では、直接的活動の過程で、活動主体が、「現実の原因」に基づく活動継続の困難に直面して、その「状況」を「問題状況」として対象化し、再び統一された諸要素から成る「確定された状況」へと転換するためのプランを確立する過程として、説明する。「反省（探究）」の操作は、専ら直接的活動の「現実」の破綻を契機として始めると、この「探究の理論」では説明されているわけではあるが、彼のこの説明は、経験の事実とは相反する。「現実」の破綻に直面しなくとも、人は行為の改善に積極的に努力する。彼のこの説明は、人間、「精神的存在」が、常に一定の「意味」の文脈を背景として事物やできごとを知覚し、取り扱うものであるという、彼自らの年来の最も根本的な主張に相反している。「反省（探究）」活動の硬直した理解は、それを構成する「状況」概念の説明において、さらに明白に露呈される。本稿は、「状況」概念のそうした問題点を指摘し、彼本来の理論的立場に基づく新たな「状況」の考え方を示唆することをめざす。

### KEY WORDS

状況 situation 意味 meaning, sense, signification,  
探究 inquiry 第三性質 tertiary quality

#### 1) 本稿の課題：J. Dewey『論理学——探究の理論』の「状況」概念の再構成

J. Dewey の理論の体系においては、「状況」概念は、彼のいわゆる「探究」活動——換言すれば、「学習」活動——の理論を構成する、最も重要な要素となっている。そして、この「探究」の理論は、「論理学」の名の下で取り扱われている。というのは、彼によれば、「論理学」的な諸形式は、「探究」活動が成功裡に遂行される場合に、「探究」主体がその操作の前提とし、それにしたがって諸段階の操作を進めるところの、基本的な枠組ないし範疇だからである。こうした「論理学」、即ち「探究の理論」の確立の試みは、彼の長い思索活動の全過程で一貫して進められている。例えば、1903年『論理学の研究』STUDIES IN LOGICAL THEORY, 1916年『実験論理学論集』ESSAYS IN EXPERIMENTAL LOGIC, 1929年『確実性の探究』THE QUEST FOR CERTAINTY, 1938年『論理学——探究の理論』LOGIC: THE THEORY OF

---

\* 教育基礎講座

INQUIRY, 1949年『知ることと知られるもの』KNOWING AND THE KNOWN 等がそれである。そして、これらのもののうちで、最も体系的に構成されたものとして、彼のこの種の思索を最終的に集大成したものと見られるのが、『論理学——探究の理論』である。本稿は、この著作における、彼の「探究の理論」、特にその「状況」概念について、検討を加えようとするものである。

さて、『論理学——探究の理論』においては、「探究」とは、「未確定の状況を確定した状況へと、統御され方向づけられた仕方 で 転換すること」(p.104.)である、と定義されている。「探究」は「未確定の状況」において生じるわけであって、「未確定の状況」は「探究に先行する諸条件」(p.105.)とも言い表されている。そこで、「未確定の状況」ということで、具体的に如何なる事態が彼の念頭に置かれているのかというと、——必ずしも明確な記述が存在しているわけではないが——それは、われわれがその時まで に 當んでいた生活活動、即ち環境との相互作用において「均衡を乱された状態」(p.27,106.), である。「未確定の状況は、例えば空腹というような生活体の不均衡のような、諸々の現実の原因 existential causes から生じる。」(p.107.)われわれは、そうした「状況」のうちでは、「不確かで、未決定で、混乱して」いて、「面食らった」状態に陥るが (p.105.), そこ で われわれはその種の「状況」について「疑問」を抱き、それを「問題的な状況」へと転化し、かくしてそれについての「探究」が始まる (p.105, 107.) ——また、その「探究」活動は、当の相互作用における「均衡」や「統合」を「回復」して終わる (p.106,27,34.) ——ことになる、というわけである。

彼のいわゆる「生命活動の型」(p.34.)に基づく、このような「探究」の説明には、明らかに幾つかの致命的な問題が含まれている。生活活動、つまり環境との相互作用の「均衡」を——環境の、または生活体の生理学的諸条件の変化によって——たとえ「妨害」され「乱され」て、困惑させられても、われわれは必ずしもその事態について「疑問」を抱かない場合が多々ある一方、そうした「妨害」による相互作用の「不均衡」に見舞われなくとも、われわれが自らの活動の「状況」について根本的な「疑問」を感じて、それを「対象」化し相対比して、それについて反省的「探究」に乗り出す場合が、通常いくらかでも見出されるからである。ノートをとっている途中で鉛筆の芯が折れたり、読書の途中で電話があったり、洗濯物を雨模様で取り入れたり、「道路工事でこの先通行止め」にあったりしても、われわれはそれについて「疑問」を感じはしない。困惑さえ感じない場合が多い。それらは単に自明なことからであるにすぎない。一方、優れた活動モデルに出会ったり、仕事や活動の能率をもっと向上させようと努力したり、異質な活動様式に直面したり、自らの活動に含まれる異なった複数の価値観の葛藤に悩んだりする時には、われわれは、「現実の原因」によって活動(相互作用)の「状況」を「妨害」させられなくとも、自分の目下の「状況」のあり方、その「意味」について自ら進んで「疑問」を抱き、それを反省的に「探究」し、再構成しようと努めることが多い。そして、この種の「疑問」の抱懷、反省的「探究」、「状況」の再構成の努力は、われわれの日常生活において稀で例外的な場合では決してなくて、通常普段に見られるできごとであり、むしろわれわれが自らの「状況」に「疑問」を抱くに至る、最も一般的で主要な場合である。だから、彼の「探究」概念には、明らかに致命的な欠陥がある。その「探究」の理論において、この種の致命的な問題点が露呈してしまう、その理由を端的に指摘すれば、それは、彼の「探究」の理論が、われわれ、「精神的存在」が、事物やできごとをその「意味」において「理解」し「取り扱う」ものである (EXPERIENCE AND NATURE, 以下 E. N. と略記す。p.208,200.) ——という基本

的な認識——即ち、彼自らが他の種類の議論においては最も根本的な立場として繰り返し主張しているところの、基本的な認識——を、奇妙なことに、この「探究」の理論においては殆ど欠落させ、放棄して、われわれ、「精神的存在」を他の動物一般と同一の水準（いわゆる「心的—物的」水準 level of psycho-physical, *ibid.*, p.195.）に引き降ろして、われわれの活動を専らその種の水準の活動原理、「生命活動の型」に基づいて理解し説明しようとしている、からである。動物の行動を支配する諸条件は、動物に対する場合と同じ仕方、直接、無媒介的にわれわれの活動を左右するものとはならないし、また逆に、動物たちの未だ知らない諸条件——つまり、その「意味」に応じた事物・できごととの関わり合いの水準における、諸条件——によって、われわれ、「精神的存在」は、その活動（環境との相互作用）を統御する一方、またそれらの影響を被ることになる——というようなことは、実際には、既に周知のことであって、特に新たな指摘では勿論ない。

ただ、先述したように、本稿の問題関心は、J. Dewey の「探究」の理論に直接関わるものではなくて、その種の理論の構築の前提となっている、彼の「状況」概念に向けられている。彼の「状況」概念のうちにも、上述したような、「探究」理論に見られるのと同じ性格の諸問題が見出される。それらを指摘して検討することが、本稿のねらいである。本稿では、彼の「状況」概念における二つの問題を指摘して、それらにとって代わるべき理解の仕方・立場を提案する。その一つは、彼の「状況」概念においては、活動、環境との相互作用が、「一つのつながり、脈絡のある全体」a contextual whole、つまり「状況」のうちで行われると考えられているが（*LOGIC*, p.66.）、その場合、「状況」とは活動主体が仮説的に構成するところの「意味」の文脈である——ということが認められていない、ということである。もう一つは、活動、環境との相互作用の諸過程を「一つのつながり・脈絡のある全体」たらしめているものは、活動の諸過程やそれに関わる諸事物・できごとに浸透している、当該活動の或る「性質」（「第三性質」tertiary quality）あるいは「情緒」である、と彼は述べているが（*ibid.*, p.68, 69. *ART AS EXPERIENCE*, P.43.）、この「性質」が言わば圧縮された「意味」文脈（つまり、「感じ＝意味」sense）であるということ——即ち、彼の年来の根本的な持論——が忘れられてしまっている、ということである。本稿が主張する立場は、『論理学——探究の理論』の「状況」論において、彼が無視するに至った論点を復活させること、である。即ち、「状況」とは、活動主体が活動に際して構成して引き受けるところの意味文脈であるということ、および、活動主体は、この意味文脈を直接的に感受——「直観」（*QUALITATIVE THOUGHT*, 1930, in R. Bernstein (ed.), *ON EXPERIENCE, NATURE, AND FREEDOM*, p.184.）——しつつ、その文脈ないし観点の下で、目下の注目の焦点としての事物・できごとに働きかけるということ、である。直接的に感受・「直観」されている、この意味文脈こそ、彼が、ここでは「第三性質」または「情緒」と呼んで、それが「或る意味の連続体」a continuum of meanings (E. N., p.232.)であるということをついに認めようとしなかったもの、である。勿論、本稿は、こうした立場を、ただ専ら私の個人的な思いつきや意見として主張しようとするわけではない。先にも既に示唆したように、事物をその或る「意味」において——したがって、当然また、一定の「意味」の文脈を（暗黙裡に）前提して——知覚・意識し、取り扱うということが、われわれ、「精神的存在」の活動の最も基本的な特徴である——という考えこそ、J. Dewey が他の著作で繰り返し主張してきた、彼の根本的な立場であって、本稿は——『論理学——探究の理論』の、あいまいさと矛盾を含んだ「状況」概念に対抗して——彼のこの立場に光を当て、それを復活して、「探究」

の理論のより一層首尾一貫した理解を確立しようとするものである。

## 2) J.Dewey の「状況」概念の問題点

—活動の諸事物に「充ちたる性質」が「状況」を「構成する」のだろうか—

われわれは、活動に際して、或る事物やできごと（またはその或る性質）を、相互に結びつき合った、或るひとまとまりの諸事物・できごとの「つながり・脈絡」のうちで取り扱っている。この場合の「つながり・脈絡のある全体」、換言すれば「経験の或る範囲」a universe of experience (LOGIC, p.69.)が、J. Dewey の言う「状況」である。彼の「状況」の定義は、次のようなものである。

「——われわれが事物やできごとを経験したり、それについて判断したりするのは、その孤立した状態においてでは決してなくて、専ら或るつながりのある全体との関連においてである。この後者が〈状況〉と呼ばれるものである。」(ibid., p.66.)

「実際の経験では、そういった孤立した個別の事物やできごとは決して存在しないのであって、一つの事物やできごとは常に周囲の経験される世界——〈状況〉——の或る特殊な一部分、一局面である。」(ibid., p.67.)

こうした定義を例証するために、彼は、次のような事例を掲げている。

「個別の事物が著しく目立つ場合があるが、それは、全体としての複雑な環境がもたらす、使用や享受の問題を確定する上で、それがちょうどその時に特別に焦点となる決定的な位置にあるからである。」(ibid., p.67.)

「この事物やそのできごとの観察は、常に或る場のうちで行われるが、事物やできごとのそうした観察が為されるのは、行動をさらに進行させるために、或る積極的な調整的反応を為す場合に、その場が一体どのように関わっているのかということを見出すためなのである。」(ibid., p.67.)

「状況」（とそこにおける「事物」）の類似の定義は、まさにそのことを主題として考察した論文、『質的思考』にも、やや具体的な形のものとして見出すことができる。そこでは、幾分論理的な意味文脈に片寄りながらも、こう述べられている。

「私が言おうとしていることは、〈状況〉と呼ばれているものと〈事物〉と呼ばれているものとを区別することによって、示すことができる。ここで、状況ということばで意味されているのは、具体的な或る命題が結局のところ言及している主題は、或る複雑な存在——その内部の複雑さにもかかわらず、単一の性質によって一貫して支配され、特徴づけられているために、まとまりを保っている、複雑な存在——である、という事実である。一方、〈事物〉が表示しているのは、複雑な全体の或る要素であって、それは全体——要素はその内部の或る区別であるが——からの抽象によって定義される。」(ON EXPERIENCE, NATURE, AND FREEDOM, p.180.)

このような「状況」の定義やその例証を読むならば、誰でも、直ちにこう問いたくなる、即ち、彼の指摘する「状況」——例えば、「或るつながりのある全体」、または「周囲の経験される世界」、あるいは事例の言葉で言えば、「使用や享受の問題」を孕んで緊張している「全体としての複雑な環境」、「一連の行動」の進展の現段階としての「或る積極的な調整的反応」に関わりをもつ、一定の「場」——は、既にでき上がって完結した形のものとして、誰の眼にも明らかな形をとって、そちらに存在しているようなものであると考えられているのか、それとも、そ

れ（「状況」）は、活動主体自らが、活動に際して、能動的・主体的に（反省的にそれと意識してであれ、前反省的に暗黙裡にであれ）、仮説的に構成して投影するものであると考えられているのか、と。この問いは、また次のように言い換えることもできる、即ち、彼の指摘する「状況」は、如何なる「意味」にも未だ被われていない、一群の事物・できごとの相互の関係やつながりが、活動に際して、その不可避の前提条件として、活動主体に何らかの仕方で直接に刻印されるものであると考えられているのか、それとも、「状況」は、活動主体が、自らの既存の習慣的な「意味体系」を発動・駆使して、諸事物・できごと相互の間に働いているものとして読み取って、引き受けている、特定の「意味」の文脈ないし体系であると考えられているのか、と。『論理学——探究の理論』の叙述に基づいて判断する限り、J. Dewey が、基本的に見て、前者の選択肢の立場に立って説明しているのではない———ということは、少なくとも明らかである。つまり、彼は、基本的に見て、「状況」とは、既に完結しているものとして、誰の眼にも明らかな形をとって、そちらに存在しているようなものである、と考えているわけでもなければ、また、「状況」とは、如何なる「意味」にも未だ被われていない、一群の諸事物・できごとの関係やつながりが、活動に際して、その不可避の前提条件として、活動主体に何らかの仕方で刻印されるものである、と考えているわけでもない。それでは、彼は、上述の選択肢の後者の立場に立って主張しているのであろうか。否、必ずしもそうではない。彼は、「状況」とは、活動主体が、活動に際して、仮説的に構成して、投影・設定する、一定の「意味」の文脈ないし体系である、と明言しているわけでは決してない。だがしかし、もしそうであるとすれば、彼の考えの基本的な立場は、一体どのようなものなのか。

先に紹介した、「状況」についての J. Dewey の定義や例証を、われわれは、当然のことながら、極く自然に自らの生活経験の通常の事態として率直に読んで理解することになるが、まさにそのようなものとして読む＝理解する限り、そのそれぞれの場合に、われわれは、活動主体各個の「関心」や「意図」——即ち、事物やできごとの「可能的な諸結果の投影」、*「望まれた意味」*——の働きを (E. N., p.86.), 勿論のこととして読み取ることになるし、また、そこでは、活動主体が諸々の事物・できごとの「意味を所有して、それに反応し」ており、そうした「意味」(の文脈・体系)に基づく反応であるからこそ、彼の活動が「一つのつながりのある全体」として成り立っているのだ、と判断することになる。例えば、人が或る事物・できごとを「経験したり判断したり」する際には、そこに彼の「意図」が働く。そして、この「意図」は、当該事物・できごとの幾通りかの諸条件＝諸結果の見通しのうちから、とくに或る一つのものを「望み」、選択したものとして、当然、当該事物・できごとの「出現の諸条件とそれがもたらす諸結果」、つまりその事物・できごとの「意味」の文脈の理解を前提し、含んでいる。また、「周囲に経験された世界」とは、活動主体が、彼の既存の習慣的「意味」体系に依拠して暗黙裡に「意味」づけているところの、安定して、秩序立った諸事物・できごとのまとまりのことである。一方、「使用や享受の問題」とは、まさに文字通り当事者の「意図」であるが、その種の問題を確定するために、「個別的な事物」に注目する———というのは、その「意図」を、諸事物・できごとの間の一連の「目的—手段」の「意味」関係へと具体化して展開するための操作、である。また、「一連の行動を推進する」ことは当事者の「意図」そのものであるが、その「意味」文脈のうちで当面の段階の手段として「意味」づけられているのが、「調整的な反応」の試みであって、この「反応」をさしあたり着手可能な一定の「条件—結果、手段—目的」のひとまとまりの事物・できごとの組み合わせ———連の「意味」関係——へと具体化して構成

するために「この事物やそのできごと」がその「場」で想像的に取り扱われて、試みられるわけである。「場」とは、だから、そこで諸事物・できごとの間の「条件—結果、手段—目的」の「意味」関係が構成されて想像的に試演されるものとして、諸事物・できごとの「つながりあった全体」であり、或る種の「意味」の文脈・体系である。「状況」についての J. Dewey の説明を、われわれは極く自然にまさにこのように読み且つ理解する。しかし、それにもかかわらず、彼の公式的な「状況」の定義と説明は、活動主体によるその習慣的な「意味」体系への依拠や、「意図」——事物・できごとの「可能的な諸結果（＝「意味」）の投影」——の働きや、「個別的事物」の「意味」への注目とその「意味」関係の追究というような種類のことがらを、故意に排除して構成されている。要するに、一定の意味文脈の「投影」としての「状況」の主體的な構成と、それに基づく個々の事物・できごとの特殊な「意味」関係の確立という、「状況」構成における）活動主体の能動的な働きかけの要因が、そこでは一貫して無視されているわけである。こういうわけで、J. Dewey は、ここでは、「状況」とは一定の「意味」の文脈・体系の働きによって構成されるものであるということを暗黙の前提とし、それに基づいてその叙述を理解するように、事実上読者に強要するような説明と例証を展開しておきながら、他方、その公式の定義と説明では、その種の前提をむしろ意図して排除する——という、相反する矛盾した態度をとっている。その具体的な叙述を、事実上、活動主体が意味文脈として「状況」を構成するという立場で展開しておきながら、その改めての——「論理学」的な、即ち「探究の探究」理論（LOGIC, p.20.）としての——定式化に際しては、そうした立場を決して明言しない、という態度を意図してとっているわけである。

ところで、「状況」とは、われわれ、活動主体が、自らの既有的な習慣的な「意味」体系を働かせて、諸々の事物・できごとの間に一定の「意味」関係を読み取りつつ、構成するところのものである——という立場を（その公式的な定義や説明の通り）とらないとしたら、それでは、J. Dewey は、「状況」の成立または構成を一体何、どのような働きによって、説明するつもりなのであろうか。諸々の事物・できごとを「一つのつながり・脈絡のある全体」、即ち「状況」として成り立たせているものかは何か、「状況」は如何なる働きによってまさに「状況」として成り立っているのか——という、この問題に対して、彼が提示している回答は、次のようなものである。

「状況は、その直接に充ちわたる性質によって、一個の全体となる。」（ibid., p.68.）

「この充ちたる性質は、ただ単にすべての構成諸要素を一つの全体へと束ね上げるだけでなく、それ自体独特のものとして、それぞれの状況を、分割し得ず繰り返し得ない独自の状況へと構成する。」（ibid., p.68.）

「性質は、——あらゆる要素や関係に充ちわたり、そうすることによって、それらを或る固有の全体へと構成する——。」（ibid., p.70.）

「状況」を成り立たせているのは、或る固有の「性質」、「第三性質」なのだ、というのである。こうして、彼の「状況」論は、その第二段階へと入り込んでいく。ところで、或る「性質」こそが「状況」を成り立たせ、「構成する」——と主張する、彼のこの考え方は——たとえその「性質」が特別の機能を帯びたものであったとしても——一種の擬人化の表現法である。それに会った瞬間、人は誰でも、何かはぐらかされたような、非常に奇妙な感じに襲われる。だが、それは、後に考察し批評する問題である。ここでは、まず、彼がこの種の主張を例証する

ために挙げている事例を、確認しておこう。その一つは、調査・研究活動を方向づけて、それに示唆を与えるところのもの——についての事例である。

「何が問題となっているかということは、ことばで述べられる以前に、感じとられていなければならないのであって、その状況の或る独自の性質が直接に抱かれていさえすれば、観察された事実を選択、評定し、それを概念的に整序する過程を規制する働きは、既にそこにあることになる。」(ibid., pp.70-71.)

もう一つの適切な事例は、仕事を的確にこなす「職人」の事例である。

「職人は、自分の仕事を進める場合に、いつでも、自分の活動を包み込んでいる状況の或る幾つかの局面に注意する。彼が注目するのは、全体としての状況が到達している目下の発展段階において事態を決するものとなるような事物・できごとであって、それはまた、次にくるものを決定する。彼の探究や活動が直接に向けられる、この事物やその事物は、したがって絶えず変化する。彼の仕事が多量に、問題の或る面が解決されると、新たな事物やできごとによって担われた、別の側面が現れる。問題のそのような継起がもしもその場の包括的な状況によって決定されず、また、状況の質的な本性が相次いで生じる各段階の問題に充ちわたって、それらを結合しなかったとしたら、彼の活動は、意味のない三段跳びとなってしまう。」(ibid., pp.123.)

さて、まさにこのような内容を含んだ、J. Deweyの「状況」論の第二段階、いわゆる「第三性質」の理論には、一体どのような問題があるのだろうか。ここには、主たる問題が二つある。その一つは、先に示唆したように、擬人化した説明を除去して、経験的事実の単純な記述に戻すという問題である。例えば、「この充ちわたる性質が、ただ単にすべての構成諸要素を一つの全体に束ね上げるだけでなく、——それぞれの状況を、分割し得ず繰り返し得ない独自の状況へと構成する」というような説明を一度解体して、この場合の経験的事実を端的に表現するような記述に置き換えることである。そして、もう一つは、擬人化の叙述をそのようにして排除した後に、初めて直面することになる問題であって、それは、「状況に直接に充ちわたる性質」、いわゆる「第三性質」も、結局或る「意味」を帯びたものであり、それが示唆する「意味」に基づいて活動主体がその活動諸過程を方向づけ調整するところのものである、ということである。われわれは、その種の「性質」を、それが帯びている或る「意味」において直接に把握している——即ち、或る種の「意味」の文脈・体系を背景とし、そこに位置（「意味」）づけて「意識（知覚）」し捉え返している——のであって、未だ何らの「意味」にも被われていない、まったく孤立したものとしての、ただ単なる（その種の）「性質」によって、無媒介的にわれわれが刺激され、反応を迫られている——というわけでは決してない、ということである。この二つの問題点を——J. Deweyの著作を広く参照しつつ——具体的に考察してみると、

「充ちわたる性質」、「第三性質」を擬人化して、「状況」を説明している、J. Deweyの叙述に対しては、要するに、われわれ、読者の側が、その言いまわし、ことばのあや、その比喩的表現に惑わされて、あたかもそれで——「状況」を「一つのつながりのある全体」として構成している働きやメカニズムは何かという——問題がすべて解明され、説明され尽くした、と早合点したり勘違いしたりしさえしなければ、それでよいわけである。或る「充ちわたる性質」それ自体は、勿論活動の主体ではないのであるから、その種の「性質」が自ら、文字通りに、すべての構成諸要素を一つの全体に「束ね上げる」わけでは決してないし、それぞれの「状況」

を独自の「状況」へと文字通り「構成する」わけでは決してない。また、『経験としての芸術』では、この種の「性質」、「美的性質」、「第三性質」が「情緒」とも——その前反省的・前意識的な働きを強調するために（V. Kestenbaum, THE PHENOMENOLOGICAL SENSE OF JOHN DEWEY: HABIT AND MEANING, Humanities Press, 1977. pp.28-29.）——呼び換えられているが、この「情緒」が、そのことばの通りに、まさに一致するものを「選ん」だり、選ばれたものをその色彩で「染め上げ」たり、ばらばらで異質な諸々の材料に質的な統一を「与え」たり、一つの対象に「濃縮し」たりするわけでは、勿論ない（ART, p.45, 68.）。或る「情緒」は活動主体あるいは生活体ではないのであるから、ありのままの事実を言えば、それ自体が或る働きや活動の主人公、主体となるわけではない。だから、叙述や説明の分かり易さや誤解の無さを旨とする限り、この種の擬人化の表現は、初めから意図して避けるべき種類のものである。特に、「状況」についての目下の説明の脈絡においては、それが誤解を招く危険は、明らかに決定的なものである。だから、問われている問題があたかも解明されて、説明が成り立ったかのような見かけを与える、この種の擬人化の表現法から、われわれは脱却しなければならないが、かくして擬人化の表現を除去して、その場合の経験的な事実のまったく端的な記述に立ち帰るとすれば、その時、われわれは、肝心の問題——「状況」を「一つのつながりのある全体」として構成している働きやメカニズムは一体何か、という問題——が解決してしまっているのではなくて、むしろそこで初めて当該問題に真正面から直面することになる——ということに気づくことであろう。

さて、そこで、擬人化の表現を除去して、事態を単純に記述する表現へとそれを転換するという操作を、ここで試みてみよう。例えば、或る「性質」が「あらゆる要素や関係に充ちわたる」——というのは、諸々の要素や関係を包含した、或る活動に従事しつつ、活動主体が、その種の「性質」や「情緒」を（或る特殊な「意味」を孕んだものとして）一貫して抱懷し育んでいる、ということであり、また、その「性質」が「そうすることによって、それらを或る固有の全体へと構成する——」というのは、活動主体が、抱懷しているその「性質」または「情緒」（の特殊な「意味」）に依拠して、一続きの活動の諸過程を方向づける（諸過程の方向を感じ調整する）、ということである。さらに、「この充ちわたる性質」が「すべての構成諸要素を一つの全体へと束ね上げる」というのは、活動主体が、この「性質」または「情緒」を抱いて、それ（が帯びている特殊な「意味」）を手がかりとして、自らの活動を方向づけ調整しながら、一続きの活動諸過程において、多様な事物・できごと（構成諸要素）を取扱い、それらに対処する、ということである。一方、「状況の質的な本性が、相次いで生じる各段階の問題に充ちわたって、それらを結合する——」というのは、活動主体が、或る「性質」や「情緒」を一貫して抱懷して温存しながら、それ（が「意味」するもの）に主として活動の方向づけの示唆を得て、「各段階」の「問題」を確定し且つそれを解決して前進する、ということである。この種の表現に対して、調査・研究活動の事例は、J. Dewey が提示している多くの事例のうちでも珍しく、そうした擬人化の表現を免れていて、明確な叙述となっているので、繁を厭わず、再度ここに引いておこう——「何が問題となっているかということは、ことばで述べられる以前に、感じとられていなければならないのであって、その状況の或る独自の性質が直接に抱かれていさえすれば、観察された事実を選択、評定し、それを概念的に整序する過程を規制する働きは既にそこにある——」。ここでも、念のために付記しておけば、「何が問題となっているかということ」は、もはや明らかに、「状況」の単なる或る「性質」などではなくて、そこで活



動主体が直接に感受しつつ問うている、当の活動の或る特殊な「意味」である。要するに、ここでは、或る「性質」、「第三性質」というようなものが、構成諸要素や諸関係を「束ね上げ」たり、それらを「独自の状況」へと「構成し」たりするのでは勿論ない———ということが理解されさえすれば、まずそれでよいのである。諸要素や諸関係を「一つの全体へと束ね上げ」たり、それらを「つながりのある全体」としての「独自の状況」へと「構成する」のは、言うまでもなく、活動主体の働きであって、それを描いて他にない。そして、或る「状況に充ちわたる性質」、「第三性質」や「情緒」といったものは、活動主体が、まさにそうした働きに際して感受し、抱懷し、育んでいるところのものであり、彼がそれ（に或る「意味」）を直接に感受してその活動を方向づけ、それに示唆や手がかりを得て、活動の方向を調整しているところのもの、なのである。

### 3) 活動主体がそれぞれ構成して発動するものとしての、「状況に充ちわたる性質」

「状況」の理解と説明において、擬人化的表現による単なる見せかけの説明をこのように排除して、経験的事実のあるがままの記述に立ち帰った時、われわれは初めて、これから理解し説明しなければならない現実の問題に、自らが直面している———ということに気づくことになる。そこで、この第二の問題、現実の問題に取り組むことにしよう。即ち、現実の問題を具体的に明確に提示すること、そして、それについて考察し、或る解決を提案すること、である。「状況」を構成し、その働きを感受するのは、われわれ、当該「状況」のうちで活動している、活動主体である。われわれが「状況」を構成し、その働きを感受するといっても、勿論、われわれは、反省的な操作を働かせてそれを構築するのでもなければ、注意深く捜し求めてそれを探知するわけでもない。或る活動に着手する時、われわれは、その「状況」の働きを、既に勿論のこととして前提している。既に紹介した事例にも見出されるように、活動主体が専ら注目し「意識」しているものは、具体的な「この事物やそのできごと」であり、この事実の選択や評定の過程、またはその概念の操作の過程であり、この問題やその問題の考察であって、その時それらを「取り囲んでいる経験の世界」としての「状況」は、既に前提されて働かされている。直接的な活動においては、「状況」は、それ自体としては、注目や「意識」の主題とはならない。具体的な或る「状況」それ自体に注目し、それを特に反省的な「意識」の主題とするような場合といえ、それは反省的な「探究」や「批評」の活動であるが、反省的な「探究、批評」の活動それ自体は、既にその時、さらに広がり大きな、別の或る「状況」=意味文脈を、やはり勿論のこととして前提して着手されている。事態全体のこうした枠組・配置は、要するにどこまで行っても同じであって、それが、われわれ、「精神的存在」における「精神」（即ち、「意味の体系」）と（或る特殊な「意味」の）「意識」の働きとの、根本的に相関的な構造なのである（E. N., p.229-230.）。

ところで、そうだとすれば、われわれは、「状況」をいわば暗黙裡に構成しているわけである。そこで、それでは、「状況」を暗黙裡に構成し前提するということは、どういうことか、それは一体何をする———どのような心身の働きの過程を辿る———ことであるのか。「状況」を前提（構成）する、その諸過程が〈暗黙裡〉のことだからといって、それは、われわれが何もしていないというわけでは、当然ない。われわれは何かをしている。但し、それは、われわれが反省的「意識」を働かせて、目的「意識」的に何かを為すことでは、もはやない。それは、われわれの心身が、暗黙裡に、つまり前反省的、前意識的な仕方で、または習慣的に辿るところの、或

る一連の過程である。そして、この時、われわれが、その心身の自ずからの働きの諸過程で、終始一貫してある一定の固有の「情緒」、「第三性質」を抱懷し維持しながら、それに身——心身——を委ねて、主としてそれから活動の全体的な方向性や適切性等についての或る種の手がかりや示唆を得ている——ということが、決定的な意義をもつ、というわけである。「状況」を構成するということは、ここまでくれば、結局、或る「情緒」、「第三性質」に心身を委ねて、この心身の自ずからの働きそれ自体が活動の全体としてのまとまり、即ちその方向性や適切性を規制するようにする(暗黙裡にそうする)、ということである。さて、ここまできて、われわれは、ようやく、目下われわれが直面しているところの問題を、具体的に定式化して提示することができる立場に立った。われわれが目下直面している問題、それは即ち、こう表現することができる。

「状況」を構成することとはつまり、或る「情緒」、「第三性質」を抱懷し、それに心身の働きを委ねて、この心身の自ずからの働きそれ自体が活動諸過程の全体としてのまとまり、その方向性と適切性を規制し維持するようにさせることである——とすれば、

- (1) 「情緒」、「第三性質」が、心身の習慣的な暗黙の活動と、まさにそのように直接、全面的に結びつき合うことができるのは、一体何故なのか。換言すれば、その両者の間に一体どのような形成過程の重なり合いが存在しているからなのか。
- (2) 「情緒」、「第三性質」——を帯びた心身の暗黙の働き——は、一体どのようなメカニズムに基づいて、活動諸過程の全体としての方向づけや適切性に示唆を与え、それをチェックするように働くことができるのか。

まさにこの種の問い、「状況」の構成ないし成立をめぐるこの種の現実の問題について、納得のいく説明を『論理学——探究の理論』や『経験としての芸術』に求めてみても、そこでは、既に見たように、擬人化された「充ちわたる性質」または「情緒」の働きの依拠した説明によって、この種の(「状況」の構成の)問題が解決済みのものとされてしまっているので、個々の事例の例証に垣間見られる J. Dewey らしい洞察を別とすれば、もはや、さしたる示唆は得ることができない。『経験としての芸術』について考察しながら、V. Kestenbaum も、「状況」の構成をめぐる、「美的性質」——または「第三性質」、「情緒」——の働きの擬人化された表現に訴える以上には、さらにその考察を前進させようとはしていない、そこでの J. Dewey の議論の態度に当惑して 次のように述べている。

「習慣こそが、状況のうちに存在することができるために不可欠のものであるが、それにもかかわらず、その種の性質が——勿論、それはまた、いつでも状況の性質であるのだけれども——習慣の働きであるということを、デューイは明確に主張してはいない。」(THE PHENOMENOLOGICAL SENSE OF JOHN DEWEY: HABIT AND MEANING, p.30.) Kestenbaum は当惑しながらも、『経験としての芸術』における J. Dewey のそうした不徹底な説明を補完するために、『質的思考』のうちから、J. Dewey が事例として掲げている、別の文章を引用している。それは、イングランドの浜辺の或る岬を見て、それに似たウェールズの別の岬を思い出した、という事例について、それはどのようなメカニズムの働きによってなのか、という解釈をめぐる、F. H. Bradley を批判して、彼が展開した議論である。そうした複雑な操作を通じて、Kestenbaum が論証したいと考えているのは、要するに、「美的性質」は『習慣の働き』であるということ、そして、「習慣が、勿論のこととしての意味(の体系)をもらたす」ということであって、J. Dewey もこれらの事実を既に洞察していて、それを踏まえていたはず

である、ということである。しかし、Kestenbaum のこの試みは、成功しているとは、決して思われない。何故なら、ここ（『質的思考』）でも、J. Dewey は、『経験としての芸術』や『論理学——探究の理論』におけると同様、「どんな反省的分析にも先だって、それとは独立して働くとともに、それを生み出すところの、直接的に経験される性質」、「全体としての状況の規制的な性質の優先性」、「根底で働く、充ちわたる性質の影響」というような種類のことをただ繰り返しているだけであって（ON EXPERIENCE, p.195, 194.）、この種の「性質」の形成の過程やその「状況」構成における働きについて、それ以上のことを述べてはいない、からである。勿論、ここでの J. Dewey の——F. H. Bradley に対する——反論は、それなりに有効ではあるが、われわれの目下の問題関心から見て、新たな意義を含んでいるものではない。

ただ、しかし、Kestenbaum の目論見とは別に、この『質的思考』には、『経験としての芸術』や『論理学——探究の理論』とは明らかに異なった、「状況の性質」についての新たな論点が見出される。それは即ち、人々がこの種の「性質」を感受・察知する能力は、習得され、習慣的に形成されるものだ、という J. Dewey の説明が、新たに付加されている、という点である。彼は、こう述べている。

「或る絵を見た人が、ひと目で、それはゴヤのものか、彼に影響された誰かのものだ、と言う。彼は、絵の諸要素のどんな分析やどんな具体的な確認をするよりもはるかに以前に、そう判断する。そこに働いているのは、全体としての絵の或る性質である。熟練した観察者の場合には、充ちわたる性質に基づいたこうした判断は、その後の諸要素や細部の具体的な分析へと結びつく。その分析の結果は、ゴヤというものだという最初の判断を裏書きすることもあるが、それを退けることもある。そのいずれにせよ、全体としてのそうした性質の基本的な判断は、歴史や筆遣いの機械的な要点を知っているが、この種の充ちわたる性質への感受性を欠いている批評家が行う、外面的な分析よりも、細部の分析とその結論にとって信頼すべき基盤となる。」（ON EXPERIENCE, pp.195-196.）

絵画における「ゴヤ」的な性質とか「レンブラント」的な雰囲気といった、特殊に専門化したものの「直観」的な把握（ibid., p.184.）においては、そのための「感受性」の形成や「熟練」の必要性が、特に顕著なものとなる。そのために、その種の活動領域では、こうした「状況に充ちわたる性質」を捉える能力やメカニズムは、われわれが習慣的に形成し、それに習熟していくものなのだ——ということが、誰の目にも明らかな仕方で露呈される。勿論、「芸術家もまた、その制作においては、鑑賞する者の態度を働かせて活動している」（ART, p.48.）。そして、彼は、「諸性質相互の関係ということばで以て考える」のであって、彼もまたこうした思考の「メカニズム」に熟達することによって、「繊細、機敏で、確實且つ多様な」活動が可能となる（ibid., p.46. HUMAN NATURE AND CONDUCT, p.66.）。ところで、「全体としての状況の性質」の感受・所有がわれわれの既有的或る習慣の働きであるという、この基本的な性格は、芸術活動というような特殊に専門化された活動領域だけに特別に見出される傾向であるわけではなくて、日常普段の生活活動の領域、場面においても、一般的に指摘され得るもので、「状況の性質」の感受・所有ということそれ自体に本質的な性格なのだということは、多様な経験的事実によって明らかである。芸術活動よりはやや日常の生活活動に近く、より分かり易いものとして、既に紹介した調査・研究活動の事例がある。調査・研究に際しては、「何が問題となっているのか」ということが暗黙裡に既に感じられていなければならないと、そこでは指摘されていた。そして、そこではまた、そうした「感受性」を適切に働かせて進められる調査・研究活動が必ずし

も多くはない、ということも示唆されていた。研究者は、問題的な「状況」に独特の或る「疑わしさ」を敏感に「直観」できるように、自ら訓練しなければならないのである。同じように、「職人の仕事」の事例は、われわれの日常生活にさらに近く、理解が容易である。しごとの「状況」内の諸事物、諸問題への目配りを一貫して導いているのは、彼における「状況の質的な本性」の掌握であるが、職人のこの種の仕事勘が「徒弟」的な訓練によって形成されねばならないものであり、それは職人たちそれぞれによって程度の差があるということは、既に一般に知られていることである。そして、「状況の性質」への理解が以前の経験によって形成されたもの、その成果であるということ为例証する経験的な事実は、われわれの日常普段のできごとにおいても、多様な仕方で指摘することができる。「肉親の似寄り」(ON EXPERIENCE, p.196.)は、まったくの初対面の相手に、最初からいきなり気づかれるわけではなくて、交際の深まりの程度に応じて次第に明らかになってくる。同じ種類のものに、いわゆる「昵懇知」acquaintance-knowledgeがある。これは、ある人物や事物・できごとを個人的に、または直接に熟知しているということであって、或る人と面識があるということは、或る場面でその人が一般にどのように行動するか、予見できるということ、その人の性格への或る洞察を持っているということであり、或る事物を熟知しているということは、その事物の諸結果を十分に予測して、前以ての適切な対処が容易にできるだけでなく、それを取り扱う「状況」に身をおいた場合の固有の「情緒」を実感することができるということである。人物や事物のそうした理解は、それらのものとのこれまでの交渉の経験の結果であって、交渉が相当程度深まった段階で初めて成立するところのものである (LOGIC, pp.151-152. E. N., pp.248-249.). この種の問題について、J. Dewey は次のような事例を上げている。

「或る人物が或る性質や性格をもっているという話を聞いていて、よく分かっているつもりでいたが、或ることがらに話が及んで、それを遮ってこう叫んでしまうことがある。くなあんだ、君はトーマス・ジョーンズのことを話しているのか、僕はまた、ジョン・ジョーンズのことを語っているのかと思っていたよ、と。」(ON EXPERIENCE, p.179.)

一方、子どもは、自らの活動の「状況」が危険であることをまだ十分には分かっているないので、そうした場合には、彼の意志に逆らっても、そこから引き離さなければならないことがある(「直接的統制」)(DEMOCRACY AND EDUCATION, M. W. ed., p.31.). また、子どもは、自分の振舞の「性質」が「くいしんぼう、行儀悪さ、等々を意味する」ことを、社交を通じて学ばなければならない (E. N., pp.199-200.). われわれの「状況」認識に比べれば、子どもたちのそれは、極めて未熟で甘い、と言わざるを得ない。

「子どもの経験は激しく懸命であるかも知れないが、過去の経験に基づく背景を欠いているために、為すこととそれへの反作用との関係がはっきりと捉えられていず、この経験は、十分な深さと幅をもってはいない。」(ART, p.44.)

ここまでくると、J. Dewey が「状況」の定義に込めていたところの、もう一つの暗黙の意味が明らかになる。彼は、「状況」とは、「周囲の経験された世界」、「経験の範囲」である (LOGIC, p.67, 68.) と述べていたのであるが、それは、「状況」とは、「経験」を通じて、即ち習慣的に形成される「世界」なのだ、という意味なのである。

こういうわけで、「状況の性質」——そこでまさに「何が問題となっているのかということ」——の感受や把握の仕方は、経験的に習慣として形成されるものであって、「状況」とは「周囲

の経験された世界」であるということが、一般的に確認されるとすれば、勿論、それに続いて直ちに問われるのは、こうした新たな認識が「状況」の概念の理解に対してもつことになる意義は何か、ということである。そこで、次に、この問を明確に、且つ可能な限り具体的な形態をとって提示し、そのことによって示唆されてくるところの、「状況」概念の新たな特性を捉えて、定着してみよう。

そこで「何が問題となっているのかということ」が、活動主体の、ちょうどその種の「状況」に関する経験——つまり、「熟練」の程度や仕方——によって、相異なったものとして感受され、かくして結局その活動の方向やその諸段階の取り組みのあり方を異なったものとして基本的に規定してしまうとすれば、そこで「問題となっていること」、「状況に充ちわたる性質」、あるいは「状況」の具体的なあり方そのものが、活動主体のその種の「経験」、彼自身の「経験の範囲」、「周囲の経験された世界」の具体的なあり方によって決定される、ということになる。「問題となっていること」、「状況の性質」、そして結局「状況」は、初めからでき上がったものとしてそこにあるものであって、われわれはただそれがあるがままに直接感受し受容して、その中で、そこにある諸要素を取り扱って活動するだけ——というような活動のメカニズムが、われわれに構造的に成り立っているのだとしたら(いわゆる、「知識＝サーチライト理論」, E. N., p.235, 233.), われわれが「状況」を看とる仕方には、「熟練」や経験に基づく差異は、基本的には現れようがないであろう。その場合には、或るできごとに際会した人々は皆、同じ「状況」を感受して、同じ態度をとる、ということになる。それは、しかし、明らかにまったく異様な光景であって、われわれの通常の経験の世界のできごととは完全に背反している。J. Dewey もそうした見方を否定して、既にこう述べていた。

「現実の条件がそれ自体まったく確定している時でさえ、その意義については、つまり、生活体との相互作用においてそれが何を表し、何を前触れしているかについては、未確定である。」(LOGIC, p.107.)

〈或るできごと〉とは一体何か、そもそも何が生じているのかということについて、人々が思い抱く判断は、実際には千差万別である。「何が問題となっているのかということ」、「状況に充ちわたる性質」を捉える、その仕方・程度は、人——の経験——によって多様なあり方をとることになるが、その種の差異が最も極端な形をとるに至った場合が、「問題となっていること」の有無、或る「状況の性質」(したがってまた、その種の「状況」それ自体)の存否、或るできごとが生じたか否かの判断の差異、である。活動の方向や態度における、まさにこの種の差異や対立は、われわれの通常の経験のうちでは、それほど特別のことがらではない。或る危機の切迫に悩み、その対処の準備に没頭している人々の傍らには、いつでものんびりと成り行きを楽観している、無関心な人々の群れがいる。J. Dewey は「歴史のできごとが帯びる性質」について言及しているが(ON EXPERIENCE., p.179.), 例えば、革命のバリケードのそれぞれの側では、生じているできごとそれ自体が異なっている——その活動の方向がまったく対立しているように。どちらの側にもそれぞれ固有のできごとの見方があり、何が生じているかの判断があり、利害と関心と期待があり、「状況」の展望がある。事態のこうしたあり方は、個人的な生活のできごとにおいても、基本的に同じである。だから、われわれは、こう結論することができる、即ち、「何が問題となっているのかということ」を決定し、或る「充ちわたる性質」を帯びた「状況」を——勿論、環境諸条件の必要で且つ可能な限りの観察を並行的に進めつつ——構成し、または設定して引き受けるのは、われわれ、活動主体であって、そうした「状況」の構

成・設定と活動諸過程の構想（「意図」ないし「志向目的」end-in-view, E. N., p.86, HUMAN NATURE. p.209.）とは同一のできごとの、表裏に面である、と。

さて、「状況に充ちたる性質」、「第三性質」について指摘しておかなければならない、最後の論点は、それが、活動や経験の「状況」が含んでいる諸々の「意味」、「意味」の文脈ないし体系を濃縮して直接体现しているものである、ということである。上述したように、われわれ、活動主体は、周囲の諸事物・できごとの間に、それらを包括・統合するような或る固有の「性質」を読み取って、それによって一つの「状況」を自ら構成しつつ、活動の諸過程を展開する。そして、周囲の諸事物・できごとの間に或る「性質」を看取る場合に、その種の類似の場面の取扱いに関して「経験」の蓄積があるか否か、「熟練」しているか否かということが決定的な問題となる——ということを確認した。ここで、もう一度改めて反省的に問い直してみたいのは、こうした「状況の性質」を感受し「直観する」過程が、「経験」の蓄積や「熟練」に決定的に依存している——ということが、一体何を——その種の「性質」について——具体的に意味しているのか、ということである。あるいはまた、J. Dewey は、或る「状況の性質」を感受し「直観し」ていることが、そこでの活動主体のその後の活動に一貫して示唆を与え、それを決定的に方向づけたり規制したりする、と繰り返し述べている。調査・研究活動では、「何が問題となっているのかということ」を直接に感受し・所有していることが、「事実」の選択とその概念的な整序の操作の過程を規制するし、職人は、「状況の質的な本性」を熟知していることによって、自ずから諸段階の手順を一貫したまとまりのあるものとすることができる。新たな事例を、ここでもう一つ引いておくとすれば、

「要するに、直観とは、充ちわたる或る性質に目覚めて、それを働かせて、適切な区別を決定したり、条件としてであれ関係としてであれ、思考の妥当な対象となるものを決定したりする過程を規制すること、を意味する。」(ON EXPERIENCE, p.184.)

そこで、改めて反省的に問い直してみたいのは、「充ちわたる性質」のこうした「直観」が、その後の活動——諸事物・できごとの「意味」関係を辿ることをその内容とする思考活動も含めて——の具体的な操作諸過程を方向づけて、それを「規制」することができる——ということが、一体何を、その種の「状況の性質」について物語っているのか、ということである。

過去の「経験」の蓄積を目下の「状況の性質」の洞察や構成の拠りどころとして働かせるということは、いわゆる「経験から学ぶ」(D. E., p.49.)ということである。だから、われわれの目下の問題は、また、「経験から学ぶ」ということは、そもそもどのような(われわれの心身が辿る)諸過程を指して言うのであろうか、そして、「経験から学ぶ」過程に、「状況の性質」は、その不可欠の働きとして、どのような役割をはたしているのであろうか——という形式の問いへと、言い換えることができる。われわれは「学ぶ」ことによって「成長する」わけであるが、「成長の表現としての習慣」について論じた部分で、J. Dewey が引いている、次の事例は、われわれの目下の論点の考察にとって、非常に具体的で分かり易い手がかりを与えてくれる。

「初めての町に慣れる過程を考えてみよう。最初は、過剰な刺激にみまわれて、余計で徒らな反応に終始する。次第にある刺激が適切なものとして選ばれて、その他のものは退けられる。われわれはもはやそれに反応しないということもできるし、もっと正確に、それらに対して或る仕方を持続的に反応している、ということもできる——適応の均衡状態である。このことが意味しているのは、第二に、このような持続的な適応が、その機会に応じて特殊

な諸々の適応が為される場合の背景となる、ということである。われわれは環境全体を変革しようとは考えない。われわれは、多くのものを、勿論のこととして、それが既にあるように受け容れている。この背景に基づいて、われわれの活動は、必要な変化をもたらすための努力を或る点に集中する。慣れるということは、だから、その時変革しようとは思っていない環境へのわれわれの適応であって、この環境がわれわれの能動的な習慣にその手段を与えるものとなる。」(ibid., p.52.)

つまり、以前の「経験から学ぶ」という時、「以前の経験」から持ち越されるところのものは、そこで習熟して、「持続的な適応」の様式となるに至った、活動——即ち、環境との相互作用——のいわば構造的な部分である。その「持続的適応」の様式が、「勿論のこととして」、今日下の活動においても、その暗黙の「背景」となっているもの、以前の活動諸過程で習熟して、「持続的適応」の様式となったもの、である。そして、この種の暗黙の「背景」、「持続的適応」の様式、つまり「以前の経験」を、われわれは、かつてその「経験」の過程を彩り方向づけていた、或る固有の「(状況の)性質」ないし「情緒」で以て代表させて把持しているが、この「以前の経験」、「持続的な適応」の様式は、新たな活動の「状況」の構成とその諸過程の構想・見通しに際しても、当然その暗黙の「背景」として働くものとなる。新たな活動の「状況」への——「以前の経験」またはその「持続的な適応」の様式の——このような持ち越しと発動に、基本的な支障と変更がない限り、その「経験」を彩るものとして働いていた、固有の「状況の性質」あるいは「情緒」は、当然「勿論のこととして」、新たなこの活動諸過程と「状況」に「充ちわたり」、それらを規制して働くことになる。ところで、このように考えることが支持され得るとすれば、われわれの目下の活動の「状況に充ちわたる性質」あるいは「情緒」とは、「以前の経験」が包含しているところの「持続的な適応」の諸様式、換言すれば、そこで為したこと(諸条件)とその(反作用としての)諸結果の「持続的な」諸関係の理解を、言わば濃縮した仕方で含んでいる——ということになる。それは、過去の経験をいわば総括して把持し体現するもの、なのである。それは、単なるむきだしの感覚や原初的な感情・情緒では決してなくて、習熟した人が初めて抱くに至るところの、複雑な「意味」の文脈・体系の理解の凝縮された表現、なのである。子どもたちは、自らの或る行為の「性質」を教えられる時、それがもたらすことになる周囲の環境への諸結果を繰り返し指摘される。それらがひとまとまりの関係として理解される時、彼のその「経験」が——その名に相応しいものとして——成り立つが、彼は、そうした行為を「恥ずべき」もの、あるいは「勇敢」なこと等々を「意味する」ものとして心に銘記し、その後の生活に持ち越すことになる。

一方、先に掲げた、もう一つの問いは、「状況の性質」に活動主体が気づいていることが、その後の彼の活動——思考活動も含めて——の具体的な操作諸過程を方向づけ、規制して働くものとなる——ということが、まさにその種の「状況の性質」について、一体何を物語っているのか、ということであった。この問題を具体的に考察する場合にも、やはり、「状況の性質」の感受や「直観」が反省的・分析的な思考活動の操作に先んじて働くという、その経験的事実について、改めて具体的にそのメカニズムを観察し直してみることが肝心である。J. Dewey は、どこでも終始一貫して、「状況に充ちわたる性質」を感受し「直観」することが、反省的分析とか概念や思考の対象とかに「先んじて」、その「根底に横わたる」ものとして働いていなければならない、と主張している(ON EXPERIENCE, p.184, 189, 195.)。既に紹介した、調査・研究活動の事例や職人の仕事の事例でもそうであったし、絵画の鑑定の事例の説明でもそう主張

していた。V. Kestenbaum が注目した事例、イングランドの海岸を散歩していて、或る岬の光景を見てそれがウェールズの或る岬に似ていることに気づいた人——の事例の説明でも、それを「形のパターンの同一性」に基づいて、「連合」の操作によって説明しようとする、F. H. Bradley を批判して、彼は、そうした「分析的反省に先んじて、それとは独立して既に働いている」ところの、「或る直接に経験される性質」を指摘している (ON EXPERIENCE, p.195.)。以前の経験から持ち越されて、当人によって直接に感受されている或る「性質」に基づいて、その類似がまず「直観」されて、それから後に、それに支えられ示唆されて、具体的な分析的観察が——形、あるいは大きさや色等について——着手されることになる、というわけである。この論文、『質的思考』における「私の論旨」は、そもそも、「明確な論理的な定式化において、このような暗黙の、全体に充ちわたる性質に基づく決定が、承認されること」の不可欠性を主張すること、にあったのである (ibid., p.180.)。結局、J. Dewey がこれらの叙述を通じて——その反省的な意識の有無は別として——主張していることは、明らかに、暗黙裡に感受・「直観」された「状況に充ちわたる性質」は、いわば端緒的な仮説となって、その後続く反省的な水準における「状況」確定の操作や活動諸過程の分節化を規制し、それに示唆を与えている——ということである。そしてまた、まさにこのようなメカニズムや枠組は、われわれ、「精神的存在」のどんな活動にもつきまとっている、根本的な構造なのだということも、彼の示唆していることである。例えば、或る指示の所作において、A の動作が一体何を「意図」しているのか、つまりそこで「何が問題となっているのか」ということを、B は、最初から専ら反省的分析によって知るというわけでは決していない。「何が問題となっているのか」ということに或る種の見当がつかない限り、そもそも反省的分析の操作は働きようがないのである。何故なら、反省的分析の操作は、必ず一定の観点・意味文脈をその操作の前提として必要とするが、「問題となっていること」におよそ何らの心当たりもないようなところでは、そもそも観点のとりようがないからである。他の人々の議論にいきなり割り込んでみても、当初は各論者のことばや態度・表情のその場の意味内容を理解することができない。それはまた、途中から観ることになった初めての演劇や映画の場面とそこでの演技の意味、あるいは、いきなり開いた新刊本の或るページの文章やことばの意味を、われわれがすぐには適切に理解できないのと、ちょうど同じである。まったく自由な立場で初対面の人に働きかける時、われわれは非常に緊張する。彼の反応がおよそ見当がつかないからである。J. Dewey は、『論理学——探究の理論』でも、「指示」行為には暗黙の前提となる意味文脈が必要であるということについて、次のように指摘している。

「或るものをただそれだけ指し示すということは、できない。視線や身振りの方向にあるもの、すべてが、等しく指し示されることになるからである。この場合の指示行為は、その対象に関してまったく未確定である。それは、或る状況のうちで選択的に働いている——のではない。というのは、状況が設定する問題によって規制されていないし、また、その時、そこで問題解決の方法を示す諸条件を確定する、その必要性によっても、規制されていないから、である。」 (LOGIC, p.124.)

だから、われわれの間で相互に暗黙裡に前提し合い、当てにし合っているところの、生活活動の自明の「背景」としての「意味」の文脈・体系が、もしも万一否定されて、働くことを止めてしまったとしたら、われわれは否応なしに、それらをすべてことばによって明確に表現して説明しなければならないことになるが、しかしまた、どれほどことばを尽くしてみても、その



種のことがらは表現し尽くし得ないものである——ということも、既にわれわれは考察して確認している。

さて、こういうわけで、感受された「状況の性質」、またはその「直観」が、活動——反省的な思考活動も含めて——の端緒的な一種の仮説となって働く——ということが、経験的事実として確認されたとすれば、それが、まさにその種の働きを果たすことができるのは何故なのか——そのわけは、もはや明らかである。その理由は、「状況の性質」の「直観」が、「意味」の文脈・体系を（濃縮した形で）包含しているもの、あるいは、それ自体一定の（濃縮された）「意味」の文脈であるからである。事物・できごとを、そのそれぞれの「意味」に応じて取り扱う、現実の活動諸過程は、まさにその「背景」的な「意味」の文脈・体系——即ち、「状況の性質」——のうちに自らを位置づけることによって初めて、その諸段階の操作やその構成諸要素の「意味」内容を具体的に確定していくことができる。「状況の性質」とは、極めて濃縮された「意味」の文脈であり、「直接的で内在的な意味」であるということ、J. Dewey が最も見事に活写しているのは、何といても、次の「観劇」の事例である。

「或る演技が演じられている、それぞれの場面が帯びる、知的で情緒的な意味は、そこに直接働いている、或る意味の連続体の働きに依存している。もしもわれわれが、この場面に至るまでに言われたことばや演じられた行為を覚えていなければならないとしたら、今言われ、今演じられていることに、われわれは注意を払ってはいないだろう。そしてまた、今言われ、演じられていることのうちに、あの例の意味の連続体がみなぎって働いているのでないとしたら、われわれは目下の演技の意味への手がかりを持たないことだろう。このように、過ぎ去ったことがらの全体としての意味は、目下の瞬間に浮かび上がるアイデアのうちに、想起というような仕方よりも一層直接的に、一層深く浸透して働いているのである。」(E. N., p.232.)

ここでは、暗黙の「背景」として働く、「状況に充ちわたる性質」や「情緒」が、「意味の連続体」 a continuum of meanings として、明確に表現されている。そして、「状況の性質」についての彼のまさにこのような理解を理論的に表現したもの、つまり、それを明確に定式化して、定義しているのが、次の文章である。「状況」論において、彼が到達した最も明確な認識の表現として、これ以上のものを求めることは困難である。

「そこで生活体と環境の諸条件とが相互に作用し合う、状況の性質は、識別されると、意味を成す。この感じ＝意味 sense は、知覚された関係を含んでいるので、感情とは異なっている。それは、或るものを特徴づける性質として、単に確認されないままに暗黙裡に感じられている性質や情調というようなものではない。——一方、或るものの感じ＝意味は、直接の、内在的な意味であって、そのまま感受されたり持たれたりする意味である。例えば、当惑させるような諸条件にわれわれが悩んでいて、ついに或る手がかりに出くわし、すべてのものがあるべき所に落ち着く時、事態の全体が突然——よく言われるように——〈意味を成す〉。この場合、その手がかりは、或る指示、解釈への指針として、信号＝意味をもつ。一方、悟られるに至った状況全体の意味は、感じ＝意味である。——或る状況がこのような意味の二重の働き、つまり信号＝意味と感じ＝意味とを持つ時にはいつも、そこに精神あるいは知性 mind, intellect が明確に働いている。」(ibid., p.200.)

#### 4) 「状況」の再定義

—活動主体が或る「意味」文脈として構成するものとしての、「状況」—

本稿でこれまで考察してきたことをまとめて、直接的活動の「状況」をどのようなものとして理解すべきかということについて、ここに改めて提示しておきたい。ここに示される考え方は、(1.) 本稿の課題：J. Dewey『論理学——探究の理論』の「状況」概念の再構成の末尾で示唆しておいたように、彼が——『論理学——探究の理論』におけるその「状況」論の不徹底性と動揺にもかかわらず——諸他の著作において基本的に志向していたと思われる、考え方である。

まず、既に紹介した事例のうちから、典型的で単純なものに改めて注目することによって、直接的活動の「状況」の基本的なメカニズムの容易な理解を図りたい。

- \* 活動の過程でわれわれが「知覚（意識）する」のは、一定の事物・できごと（の性質）の或る「意味」、即ち、未だ成就されていない或る可能性、可能的な結果である。そして、そのような特殊な（事物・できごと、またはその性質の）「意味」= 可能的な結果に、特に注目してそれを「知覚（意識）する」時、われわれは、まさにその特定の「意味」、可能的結果を際立たせて、焦点づけるように働くところの、一群の事物・できごと（の諸性質）のつながりを、直接に洞察して、それを前提しそれに立脚している。
- \* われわれは、共同（協同）活動や相互交渉の過程で、他の成員に、或る事物・できごとを「指示」するが、その際、われわれは、——そうした共同（協同）活動や相互交渉の展開の目下の段階で——成員たちが共通に抱懷し感受しているところの、問題やそれをめぐる成員各自の役割に基づいて、この「指示」行為が理解され対処されるということを、当然のこととして当てにしている。
- \* 調査・研究活動においては、そこで「何が問題となっているかということ」を直接に感じとっていることが決定的に重要であって、そのことの洞察が、その後の、観察された事実の選択や評定、またはそれらを概念的に整序する操作を規制して働くものとなる。
- \* 観劇においては、「或る演技が演じられている、それぞれの場面が帯びる、知的で情緒的な意味は、そこに直接に働いている意味の連続体の働きに依存している。——今言われ、今演じられていることのうちに、あの例の意味の連続体がみなぎって働いているのでないとしたら、われわれは目下の演技の意味への手がかりを持たないことだろう。」

さて、このような事例をも参照しながら、これまで本稿で考察してきた「状況」の考え方についてまとめてみよう。これまでの考察で、われわれが確認してきたことは、以下の諸点である。

- (1) われわれ、既に活動の途上にある、その当事者・主体は、ある事物やできごと（の性質）——例えば、具体的なできごとや観念、ことばや行為ないし演技等——を、そのまま単独で無媒介的に、知覚・意識することはない。われわれが注目し、知覚・意識するのは、事物・できごと（の性質）の或る「意味」、換言すれば、その或る可能的な結果、である。
- (2) ところで、事物・できごと（の性質）を、その或る「意味」において知覚し意識するということは、その事物・できごと（の性質）を、諸他の事物・できごと（の諸性質）の或るひとまとまりの「つながり・脈絡」のうちで一定の位置を占め、一定の「つながり・脈絡」を担って表示しているものとして、知覚し意識するということ、である。
- (3) その場合、一群の諸他の諸事物・できごと（の諸性質）の或るひとまとまりの「つながり

- り・脈絡」を、われわれは既に暗黙裡に勿論のこととして前提している——ことになる。
- (4) その種の、ひとまとまりの或る「つながり・脈絡」は、既にでき上がったものとしてそこに——即ち、諸事物・できごと（の諸性質）の間に——存在し働いていて、誰でもそれに出くわして、ただ気づき・受け容れさえすればそれでよい、というようなものではないし、また、それらの諸事物・できごと（の諸性質）のすべてに浸透して、それらを「一全体」へと束ねあげ構成している、或る種の「性質」や「情緒」（「第三性質」）をわれわれが感受することによって成り立つ、というわけのものでもない。
- (5) 諸事物・できごと（の諸性質）の、その種の「つながり・脈絡」は、われわれ、活動主体自らがそれぞれ構成し前提するものである。そもそも何らかの活動や経験——つまり、環境の諸条件との相互作用——をするということは、それが単なる生理学的な反射反応でもない限り、ある種の「つながり・脈絡」を前提して、それに依拠することである。
- (6) 勿論、われわれが或る「つながり・脈絡」を構成したり、前提したり、それに依拠したりする——と言っても、それは必ずしも反省的で目的意識的な性格の操作であるとは限らない。むしろ、その種のある「つながり・脈絡」を、われわれは、全面的且つ完全に意識化して認識していることは決してないし、そうすることは不可能なことである。そうした「つながり・脈絡」を把握し前提する働きは、通常、われわれの心身の習慣的な暗黙の働きとして成り立っているものであって、その働きは、以前の経験のうちでわれわれが形成し習熟するに至ったものが、目下の活動にも持ち来されているわけであるが、この活動が例の通り支障なく遂行されることによって、その種の「つながり・脈絡」のここでの適切な存在と働きがいわば確認されることになる。この点についての J. Dewey の次の叙述は、示唆に富んでいる。「われわれは、自分の知覚の或る外的な起源を直接に認識しているが故に、或る事物が〈そこに〉あるということを信じている——わけではない。運動的反應を首尾よく営むことができるのだからということで、自分の感覚器官への或る外的な刺激の存在を、われわれは推測するのである。」(E. N., p.252.)
- (7) だから、諸事物・できごと（の諸性質）のうちに、如何なる規模の、どんな種類と内容の「つながり・脈絡」を読み取って前提——し、したがって、また、如何なる事物の、どのような「意味」にさしあたり着目——するか——ということは、活動主体が抱懷している「経験の世界」、「経験の範囲」によって、当然異なったものとなる。
- (8) 注目されて知覚・意識される、或る事物・できごと（の性質）の特殊な「意味」を、その一部分として包含するものとして、諸他の一群の事物・できごと（の諸性質）の間にわれわれを読み取って前提するところの、この種の「つながり・脈絡」は、「意味の連続体」であり、圧（濃）縮された意味文脈である。それは、或る事態を「質的に特徴づけるもの」として、「それ自体として感受され、直接に所有される」ような種類の「意味」、つまり「直接的、内在的意味」（「感じ＝意味」）immediate and immanent meaning, sense である。
- (9) 活動の過程で或る事物・できごと（の性質）の一定の「意味」に注目する時、既に、われわれは、その活動の過程に入り込んでくる一群の諸他の事物・できごと（の諸性質）を、「或るつながり・脈絡のある全体」、換言すれば、一定の「直接的・内在的な意味」の文脈によって特徴づけられる、或る事態——つまり、一つの「状況」——として見てとり、構成し、前提して、その種の洞察ないし「直観」に依拠している。
- (10) だから、「状況」とは、活動の諸過程、諸部分を具体的に「意味」づけるものとして、一

群の諸事物・できごと（の諸性質）の間に、活動主体が自ら読み取り、構成するところの、一定の意味文脈である。活動主体が自ら構成し、前提・投影するものであるということ、およびそれは意味文脈として読み取られるものであるということを強調して表現すれば、「状況」とは「状況」認識なのだ、とすることができる——勿論、ここでは、〈認識〉といっても、それはいわゆる反省的・分析的「認識」という意味ではなくて、把握や洞察という常識的な広い意味で用いられているわけであるが。

以上に指摘した諸論点が、これまでの考察に基づいて確認され且つ承認されるならば、本稿の表題に掲げたところの、私の課題は、論証の過程を辿り終えたことになる。

## Some Problems in John Dewey's Theory of "Situation"

Toshio KINEFUCHI (Division of Foundations)

### ABSTRACT

"Reconstruction of experience" is one of the most significant themes in J. Dewey's philosophical theory. According to him, "reconstruction of experience" means, in its essence, to re-construct—by means of "inquiry"—the habitual way of behavior. The habitual way of behavior is the way in which we, in the process of our overt action, immediately grasp our own situation of the action. If so, the task of thinking about this theme, "reconstruction of experience", set some subdivided, more concrete problems to be clarified. Such are, for example, these problems—how (by means of what mechanisms) are we habitually aware of our own situations of actions in the process of our everyday-life, and when do we begin to put in doubt decisively our own habitual way of understanding these situations, and moreover, what is the most important difference between the mechanisms of perception of situation in the process of overt action and in reflective process of inquiry?

The purpose of this paper is to make study of the first problem, that is to say, to find his answer to the question, how are we habitually aware of situations of our own overt actions in the everyday-life process?